

座長 寺田盛紀
長尾由希子

13:00~13:20	S71	保護者向けキャリア教育研修の効果測定についての 一考察一保護者キャリア意識尺度の作成の試み一	松下真治	大阪市立生野工業高等学校
13:25~13:45	S72	6か国における高校生の職業観形成の縦断的研究 一キャリア学習経験とキャリアモデル形成の影響を中心 に一	○ 寺田盛紀 清水和秋 山本理恵	名古屋大学大学院教育発達科学研究科 関西大学社会学部 NPO法人産業メンタルヘルス研究所
13:50~14:10	S73	一霊四魂に基づく質問紙テストの尺度の作成 一個々の特性を人生に生かすために一	○ 安生祐治 榎本和生 出口光	多摩美術大学美術学部 多摩美術大学美術学部 日本ライフキャリア協会
14:15~14:35	S74	専攻の選択における規定要因およびその変化に関する 一考察一誰が「職業知」を求めたのか一	長尾由希子	聖カタリナ大学人間健康福祉学部
14:40~15:00	S75	高等学校2年次における職業的自己概念の形成過程に 関する研究 一全日制普通科課程進路多様校における 一事例をもとに一	安田 マヤ子	上越教育大学大学院

保護者向けキャリア教育研修の効果測定についての一考察

-保護者キャリア意識尺度の作成の試み-

松下 眞治

(大阪市立生野工業高等学校)

問題と目的

本研究は 2011 年度本学会の研究大会で発表した「保護者向けキャリア教育研修の実施と課題についての一考察」（松下）の続編的な意味を持つものである。保護者がキャリア教育研修を受講し、その研修の効果測定するためには尺度作成の必要性があった。そのため、日本語版 W B B L「コーピングスケール：ソーシャルサポート」、母性意識尺度「積極的・肯定的意識」（1988 大日向）、社会人基礎力尺度「傾聴力」、「状況把握力」、「課題発見力」（2009 浅井）、達成動機測定尺度「競争的達成動機」（1987 堀井）などの項目内容を参考に質問紙を作成した。また、質問紙は研修終了後、多忙な保護者が短時間で回答できるように項目数を極力少なくするように配慮した。

方法

（1）本調査

①大阪府内の A 学区の高等学校の保護者 150 名を対象に調査（主に郵送）を行った。（有効回答率：67.3%）

②調査内容

質問紙（30 項目）による調査を行った。質問紙のフェイスシートで保護者の性別、生徒の学年の調査を行った。

③時期

2012 年 1 月下旬～3 月下旬に調査を実施した。

④分析方法

30 項目について、「よくあてはまる。」～「全くあてはまらない。」の順に 4～1 点と点数が高くなるほど保護者の行動や意識の強さを表している。30 項目の平均値や標準偏差といった記述統計を算出し、天井効果のあった 5 項目、共通性、負荷量の低い項目 6 項目を削除し、19 項目で主因子法（Promax 回転）を行い、因子数を確認した。そして、クロンバックの α 係数を算

出した。

結果

表1 項目の平均と S D

	項目内容	度数	最小値	最大値	平均値	SD
1	子どもの個性を尊重することができる	101	2	4	3.29	0.50
2	親(保護者)であることに充実感を感じる	101	1	4	3.30	0.69
3	子どもの進路について、信頼できる人にアドバイスをもらうことがある	101	1	4	2.84	0.78
4	事実や証拠をもとに、発言することができる	101	2	4	3.05	0.65
5	メリット・デメリットをよく考えることがある	101	1	4	3.06	0.73
6	子どもが社会で高く評価されている会社や大学を望んでいる	101	1	4	2.58	0.77
7	子どもが他の人と競争して勝つことを望んでいる	101	1	4	2.40	0.69
8	子どもにはいろいろなことを学んで自分を深めてほしいと強く願っている	101	2	4	3.70	0.52
9	自分自身を成長させ、たくましくなりたくて強く願っている	101	1	4	3.43	0.67
10	いろんな出来事のプラスの面を見つけないかと思っている	101	1	4	3.53	0.69
11	子どもの進路について、誰かに話して情報を得ることがある	101	1	4	3.17	0.72
12	データにもとづいて考えることができる	101	1	4	2.79	0.77
13	分からないことがあれば、進んで勉強したいと考えている	101	2	4	3.14	0.63
14	子どもを理解しようとする姿勢で話を聞ける	101	2	4	3.15	0.52
15	子どもの意見を否定することができる	101	1	4	2.68	0.58
16	子どもの進路について、誰かに聞いてもらうことがある	101	1	4	2.95	0.71
17	事例やデータ、数字を使うことがある	101	1	4	2.48	0.73
18	子どもには結果を気にしないで何かを一生懸命やることを望んでいる	101	2	4	3.31	0.54
19	子どもには決められた仕事のなかでも個性を生かしてほしいと強く願っている	101	2	4	3.33	0.66
20	親(保護者)になったことで人間的に成長できたと思う	101	2	4	3.50	0.61
21	子どもが自分と違った価値観でも尊重することができる	101	2	4	3.21	0.55
22	何事にも興味と好奇心を持って接している	101	1	4	3.21	0.68
23	現状を分析することができる	101	2	4	2.86	0.55
24	子どもにはみんなが喜んでもらえるようなことをしてほしいと望んでいる	101	1	4	3.25	0.70
25	親(保護者)であることに生きがいを感じている	101	1	4	3.28	0.74
26	子どもが世に出て成功してほしいと強く願っている	101	1	4	2.97	0.81
27	ものごとを客観視することができる	101	1	4	3.02	0.60
28	子どもの気持ちを受け止めることができる	101	2	4	3.10	0.44
29	子どもが名誉や地位を得ることを望んでいる	101	1	4	2.29	0.70
30	子どもの進路について、先生に相談することがある	101	1	4	2.64	0.72

天井効果により項目 8, 9, 10, 20, 25 を削除, 3 回因子分析した結果, 4 因子 (56.0%) が得られた。

表2 保護者キャリア意識の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III	IV
事例やデータ、数字を使うことがある	0.74	0.01	0.07	-0.09
データにもとづいて考えることができる	0.72	0.09	0.15	-0.05
事実や証拠をもとに、発言することができる	0.69	-0.04	-0.06	0.12
メリット・デメリットをよく考えることがある	0.55	0.00	0.04	-0.10
ものごとを客観視することができる	0.47	-0.14	-0.07	0.40
子どもの進路について、誰かに聞いてもらうことがある	-0.07	0.78	0.09	0.05
子どもの進路について、誰かに話して情報を得ることがある	0.07	0.74	0.08	0.04
子どもの進路について、先生に相談することがある	-0.15	0.72	-0.01	-0.06
子どもの進路について、信頼できる人にアドバイスをもらうことがある	0.24	0.66	-0.13	-0.08
子どもが名誉や地位を得ることを望んでいる	-0.11	0.00	0.72	0.09
子どもが他の人と競争して勝つことを望んでいる	0.20	-0.03	0.66	-0.04
子どもが社会で高く評価されている会社や大学を望んでいる	0.14	0.04	0.64	-0.25
子どもが世に出て成功してほしいと強く願っている	-0.01	0.09	0.57	0.35
子どもには決められた仕事のなかでも個性を生かしてほしいと強く願っている	0.01	-0.10	0.27	0.59
子どもにはみんなが喜んでもらえるようなことをしてほしいと望んでいる	-0.14	0.05	0.26	0.51
子どもを理解しようとする姿勢で話を聞ける	0.07	0.10	-0.16	0.49
子どもの個性を尊重することができる	0.22	-0.01	-0.22	0.47
子どもの気持ちを受け止めることができる	-0.10	0.18	-0.25	0.46
子どもには結果を気にしないで何かを一生懸命やることを望んでいる	-0.09	-0.13	0.06	0.42
因子間相関	I	II	III	IV
I	-	0.23	0.18	0.21
II		-	0.10	0.16
III			-	-0.04
IV				-

6 か国における高校生の職業観形成の縦断的研究

ーキャリア学習経験とキャリアモデル形成の影響を中心にー

○寺田盛紀

清水和秋

山本理恵

(名古屋大学大学院教育発達科学研究科) (関西大学社会学部) (NPO 法人産業メンタルヘルス研究所)

はじめに

寺田・紺田・清水は、2009 年 8 月から 2010 年 3 月の間に日本、アメリカ、ドイツ、中国、韓国、インドネシアの 6 か国 17 校 1931 名(男子 998 名、女子 928 名、不明 5 名)に対して進路選択と職業観に関する国際比較アンケート調査を行った(キャリア教育研究,第 31 巻第 1 号, 2012, 近刊)。そこでは、職業観に関する 28 項目の探索的因子分析から抽出しうる因子の構造、各因子尺度とキャリアモデルとの関連、キャリア形成活動と職業観尺度の関連などが明らかにされている。

1 本調査研究の方法

そこで、2011 年 6 月から 11 月の期間に、1931 名の生徒に対する同じ質問紙による追跡調査を行った。本発表は、2 回目の調査でも協力が得られた 17 校 1061 名(男子 592 名、女子 467 名、不明 2 名であり項目により欠損値が異なる)の縦断的データの分析結果である(表 1 参照)。分析では、進路選択・キャリア形成活動に関する質的項目に関して 2 回のデータにおける変化を国別・学校別の分散分析、職業観 28 項目の 2 回目のデータの探索的因子分析、1 回目に得られた因子との一致性や変動(差異)の分析、キャリアモデルの取得パターンやキャリア形成活動の効果認識の有無を規定要因とする職業観 4 尺度の反復分散分析を行う。

2 進路選択・キャリア経験における変化に関する分析

学校の学習以外の諸活動の進路決定効果に対する回答では、インドネシアで「プラスになった」が 116 人から 125 人(91.2%)と突出し、0.1 水準で有意に増大している。

アルバイトの経験は、どの国でも経験者が増大している。ドイツが 14 人から 22 人(52.4%)、日本が 42 人から 87 人(39.5%)、韓国が 69 人から 77 人(35.3%)、アメリカが 23 人から 72 人(65.5%) とな

表1 縦断調査(2009-2011年)参加者(校)基本情報

国	学校コード	2011年調査	縦断回答者	性別			学校種 (2分類)
				男	女	不明	
U.S.	11	41	41	18	23	0	総合 *a
	12	38	38	17	21	0	総合
	13	35	35	13	22	0	総合
Germany *b	491	31	26	14	12	0	普通
	492	26	26	25	1	0	職業 *b
	493	151	—	—	—	—	普通
Indonesia	621	107	99	32	66	1	普通
	622	91	57	54	3	0	職業
Japan	811	114	102	42	60	0	普通
	812	151	139	131	8	0	職業
	813	218	131	55	76	0	普通
	814	294	221	69	151	1	職業
	815	160	—	—	—	—	普通
Korea	821	79	76	0	76	0	職業
	822	53	53	52	1	0	職業
	823	70	68	67	0	1	普通
	824	69	68	0	68	0	普通
China	861	142	113	60	53	0	普通
	862	139	120	67	53	0	職業(工商)
合計	19校	2009	1413	716	694	3	
今回の分析	17校		1061	592	467	2	

* 493校, 815校は2回目だけの参加のため、813校, 814校は寺田・紺田・清水(2012)に対応させ分析から除外

*a いずれも総合であり、キャリア・アカデミー等での職業科目履修如何で区別

*b 技術ギムナジウム

っている。 812 工業校、821 工業校,822 商業校のいずれも職業校で 0.1%水準で有意に増えている。また、その進路決定効果を見ると、どこの国、学校においても有意差が見られなかった。

卒業後進路では、全般的に進学希望者が増え(719 人→741 人・73.2%)、就職希望者が減る(167 人→220 人・21.7%)傾向にあった。

希望職業の有無では、日本が 94 人から 176 人(74.3%)、中国が 67 人から 84 人(36.8%)といずれも 0.1%水準で有意に増大している。中国で高校 3 年(12 年次)生の段階で「無し」が 78 人(34.2%)、「未定」が 66 人(28.9%)がいることに驚かされる。日本の普通進学系の 811 校で、「有り」が有意に増えている。

職業選択に資するイベントの有無を見ると、日本(60.4%→64.3%、中国(45.8%→61.3%)で有りが 0.1%水準で有意に増えている。

効果的イベントの内容を国別のみで見ると、「普通教科での学習」はインドネシアとアメリカが 0.1%水準で、「校外の体験学習」はドイツ、中

一霊四魂に基づく質問紙テストの尺度の作成

一個々の特性を人生に生かすために

○安生祐治

(多摩美術大学美術学部共通教育)

榎本和生

出口光

(日本ライフキャリア協会)

一霊四魂とは

一霊四魂とは、天とつながる直霊と、荒魂、和魂、幸魂、奇魂によって成り立つ日本の思想に顕れる人の心の概念である。一霊四魂が初めて文献にて確認できるのは、奈良時代の720年に完成された日本書紀の神代である(宇治谷孟, 1988 参照)。江戸時代末期から明治時代にかけては、本田親徳が道之大原や霊魂百首において、一霊四魂を記述し(鈴木編, 1976 参照)、その後、出口王仁三郎により深くまとめられた(例えば、出口王仁三郎, 1987 参照)。

日本文化から発祥した心の思想を、人間の成長や人生に生かすために、一霊四魂に基づく質問紙作成を試みた。以下の定義から、質問項目を行動(動詞)主体に作成した。

直霊(なおひ)

四魂に対してフィードバックし、省みる機能を備える。良心の機能とも言える。

荒魂(あらみたま)

「勇」の機能であり、前に進む力である。勇猛に前に進むだけでなく耐え忍びコツコツとやっていく力でもある。

和魂(にぎみたま)

「親」の機能であり、親しみ交わるという力である。平和や調和を望み力の強い人は和魂が強い。

幸魂(さちみたま)

「愛」の機能であり、人を愛し育てる力である。思いやりや感情を大切に、相互理解を計ろうとする人は幸魂が強い人である

奇魂(くしみたま)

「智」の機能であり、観察力、分析力、理解力などから構成される力である。真理を求めて探究する人は、奇魂が強いといえる。

目的

一霊四魂をもとにした質問紙テストの尺度を作成することだった。

質問紙の構成

質問紙は、計100問で構成され、一霊四魂の5因子に対し、各20の質問を作成した。回答は、1から5までの5段階で評価し、1は「10のうち1か2当てはまる」3は「10のうち5か6当てはまる」、5は「10のうち9かすべて当てはまる」だった。

調査期日と被験者

調査期日と被験者

2002年12月から2003年2月にかけて成基コミュニティー経営の個別教育学習塾「ゴールフリー」の学生講師259名が被験者として参加した。講師は大学一年生から、大学院生および卒業生が含まれ、男性127名、女性132名だった。

結果と考察

本研究では、100項目の質問を用いて、確認的因子分析の方法を採用した(重みづけのない最小二乗法、因子数を5に指定、プロマックス法)。質問項目削除の基準は、(a)共通性0.10未満、(b)因子負荷量の絶対値が0.35以下、(c)二つ以上の因子に絶対値0.35以上の負荷を持つ、とした。上記条件で因子分析を重ねた結果、78の質問項目が残った。累積寄与率は30.96%だった。表1に、質問項目、因子パターン、因子構造、共通性、 α 係数を示した。因子ごとに作成した質問項目は、概ねまとまって0.35以上の負荷量を示した。信頼性係数は、0.882から0.764を示した。削除した22の質問項目のうち、奇魂に関するものが11問含まれた。0.784の信頼性係数は奇魂のものであり、質問数の減少が働いたかもしれない、その質問項目の検討が必要である。累積寄与率の30.96%を高めるのに、質問項目の包括的な検討が求められるだろう。質問項目は、行動を主体に、条件を付け加える形で作成されたものが多い。例えば、「身近な人が参加できる機会を提供している」という質問は、「提供する」という動詞に、“身近な人”という条件を付与している。人の行動は条件によって動機付けられるものであり、それらの分析を進める上で質問項目を作成することが、更に精選された質問紙作成と標準化につながるだろう。

参考文献

出口王仁三郎(1987) 霊界物語 天声社
鈴木重道 編(1976) 本田親徳全集 山雅房
宇治谷孟 訳(1988) 日本書紀(上) 講談社

専攻の選択における規定要因およびその変化に関する一考察

— 誰が「職業知」を求めたのか —

長尾 由希子

(聖カタリナ大学 人間健康福祉学部)

問題の所在

キャリア教育の重要性が指摘され、各学校段階において様々な努力がなされてきた。周知のように高等教育機関においても、平成 23 年度以降、大学設置基準および短期大学設置基準が改正され、社会的・職業的自立に向けた指導が義務化された。

つまり、現在は高等教育機関に進学すれば就職が保証される時代ではなく、そこで何を学ぶかという質、教育の内容が問われている。

しかし、教育社会学を中心とする定量的な研究においては、いまだ教育歴を教育年数に換算する量的なアプローチが主流である。そのため、短大・高専・専門学校などの教育年数が共通の学校種における教育内容の異同や、学科や専攻の効果・特色などについては、一部の研究をのぞき十分な検討がなされてこなかった。

また、これまでの研究では、階層研究とキャリア教育を結びつける視点が弱かった。しかしながら、どのような層がどのような専攻を選択しているのか、そこに階層的な偏在がないかどうかといった点は、キャリア教育上重要であるだけでなく、社会的公正の観点からも重要であると言える。

以上の問題意識から、高等教育機関における専攻の選択を規定する要因を検討する。

分析に用いるデータ

上記のような先行研究の背景として、データ不足が一因に挙げられる。専門学校通学歴を捕捉できるデータセットも、学科や専攻の情報を含むデータセットも乏しく、両者を満たすデータとなると極めて限られる。存在しても、単独ではサンプルサイズが十分ではないなど様々な課題もある。

そこで本報告では、2005 年の「社会階層と社会移動全国調査」(SSM2005) および 2002 年の「日本版 General Social Surveys」(JGSS2002) を合併

し、分析に用いる。両データセットの調査設計は異なるが、ともに層化二段抽出であり、サンプリングには類似点も多いため、可能な限り変数を同様に作成し、1 つのデータセットとして構成した。

分析枠組および分析に用いる変数

本発表では、アメリカ合衆国におけるカーネギー教育振興財団のプログラム分類をもとに、学科や専攻を教養知と職業知に二分して分析を行う。この分類は、1990 年代、大綱化以降、経験的に指摘されてきた実学志向や教養教育の衰退などの実態を具体的に理解するのに資すると思われる。

可能であれば専攻と学校種をあわせて検討することが最善であると思われるが、サンプル数の制約などから本発表時には参考程度の情報とし、専攻(教養知／職業知)を基本として分析を行う。また、専攻を二分するだけではなく、可能な限り細分化して分析することも望ましいが、やはりサンプル数の制約もあり、二分することにより変動を追うことを主眼としたい。ただし、これを補うため、発表時にはサンプル数の確保できる特定の専攻のみ取り出した補足的な分析を示す。

なお、SSM2005 では専門学校の学科系統を捕捉可能であるが、JGSS2002 では専門学校の学科系統を捕捉できない。SSM2005 の専門学校学科系統で検討を行った場合も、専門学校の教養知を学んだ者は極めて少数であり、単独のカテゴリでは分析は難しい(コーホート 1 の男女全体で 20 人(1.2%)、コーホート 2 では 19 人(1.9%))。そのため、学校種の性格等も加味し、専攻(教養知／職業知)の変数については、専門学校はすべて職業知として作成した。

父親の職業は、自営業／ブルーカラー／ホワイトカラー上層／ホワイトカラー下層の 4 職種に分類し、ブルーカラーを基準としたダミー変数を作

高等学校 2 年次における職業的自己概念形成過程に関する研究

—全日制普通科課程進路多様校における一事例をもとに—

安田マヤ子

(上越教育大学大学院 学校臨床研究コース)

【問題と目的】

文部科学省の学校基本調査(2012)によると、中学校卒業者の高等学校等進学率は年々増加を続け、2012 年 3 月末には 98.2%に達し、高等学校全入制の時代ともいえる進学率となっている。また、高等学校普通科(以下、普通科と呼ぶ)に在籍する生徒は全国の 72.3%にも達しているという調査結果が報告されている。普通科は高等教育機関への進学を前提としてきたが、現在では普通科に進学したすべてが高等教育への進学を望んでいるとは限らない。学力構造の下位にある生徒、あるいは目的意識を持っていない生徒は、学力相応、学校の環境・雰囲気などの理由から、普通科を選ぶようになっている。このように、普通科の中でも卒業生の進路が進学(大学、短大)に限らず、専門学校、各種学校、就職、進路未定のまま卒業するなど、多様な進路がある高等学校は「進路多様校」と呼ばれている(片瀬 2005)。「進路多様校」に在籍する生徒は、「自分は何がしたいのか分からない」「どんな仕事が自分に向いているのか分からない」というように、自己や職業に対する理解や関心が不足し、自己概念形成が未熟なまま、主体的な進路選択ができずに卒業してしまう。そのため、新しい就職先や進学先に適応できない生徒も少なくない。とりわけ、高等学校の 3 年間は、身体的にも精神的にも子どもから大人への移行期で、不安や戸惑いを少なからず抱えていると考える。また、この時期は、自己を客観視できるようにもなり、学校生活における学習をはじめ、部活動や友人関係などでの行動範囲も広がり、その中で自己を模索し、確立しつつある時期ともいえる。このような時期だからこそ、進路学習の機会を用いて、生徒の進路意識啓発のための学習や体験的な学習活動を通じ、各生徒の自己理解の深化・成熟、自己概念の形成、さらに自己概念の職業的側面(以下、職業的自己概念とする)の形成を促すための指導・支援がきわめて重要であると考えられる。

平成 23 年 1 月 31 日に発表された中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会「今後の学校にお

けるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(2011)は、「現代の高校生は、身体的には早熟傾向があるにもかかわらず、精神的・社会的な成熟が遅れ、社会生活に不可欠な一般常識や挨拶などの基本的な生活習慣、さらに人間関係形成能力等を十分に身に付けていない生徒が少なくない。また、自らの将来に対して肯定的に考えることができず、目的意識を持って意欲的に生活を送ることができない生徒も見受けられる」とし、学ぶ意味を理解できず、卒業時に主体的に進路選択・決定ができない高校生の実態を指摘している。

Super, D. E. (1996)は職業的自己概念について、「ある職業集団の一員としての自己概念。職業的自己概念は職業の選択や職場への適応のプロセスで変化する」とし、さらに「職業的自己概念は一つではなく、またある時期に決定されるものではない。自己と他者、自己と環境(複数)との相互作用の中で修正、調整される」と述べている。また足立(1995)は、「職業の意味の理解に基づき、さらにその職業(なるべき自分)に関する『今の自分』の能力、適性、興味、性格、意欲などを現実吟味することと、職業につく意欲が必要になると考えられる」と青年の職業的自己概念の形成について述べている。このように他者や環境と自己との関連性を把握することにより、生徒が自己理解を深め、職業的自己概念の成熟を促すための働きかけが、学校教育において重要であると考えられる。

文部科学省『小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引』でまとめられている「高校生期のキャリア発達の主な特徴」によると、生徒は入学後、新しい環境への適応の段階を経て、2 年生になる。この段階は、学校生活における学習活動をはじめとする様々な活動により知識や技能を習得するだけにとどまらず、自己と他者や自己を取り巻く環境についての理解や検討をもとに、将来について暫定的なプランニングを実行する時期である。このことは、生徒の自己概念が形成されることにより、職業的自己概念の形成につながり、さらに将来の在り方生き